

〈はじめに〉

「やっ」ということばがあります。「やっ」と出来た」とか「やっ」と着いた」のように使われますが、私たちは、どうやって、この「やっ」という言葉の表すところを理解するようになるのでしょうか。「やっ」とは、リンゴなどの事物名詞によって示されるような具体物ではありません。また多くの動詞のように、動作の様子が目に見えるものでもありません。そのような点で抽象語の範疇に入るものですが、「楽しい」などの形容詞や「完成」などの漢語のような抽象概念を表しているかという、そうとも言えません。「やっ」と出来た！」と誰かが言ったとき、「やっ」とは、何か継続的に取り組んでいた作業が、苦勞の末にいま終わりを告げた、という“状況”を表しています。「出来た」は、いまの一瞬のことですが、それに「やっ」とがつくと、今だけでなく、それまでの過去の時間や、ときには次の過程に早く進まなければならない、といった未来の時間を幅広く取り込んで来ます。それだけではありません。「やっ」と出来た」には、それまでの努力や大変さ、焦り、そして完成したことによる安堵、など、そのことばを発した人のさまざまな“経験”や“気持ち”が含まれています。◆「やっ」とは、【副詞】に分類されることばです。副詞とは、述語となる動詞や形容詞の意味を修飾する(補い説明する)ことばで、先ほどの例に戻ると、「やっ」とは「出来る(た)」という動詞の述語を補っています。単に「出来た」という結果だけではなく、「やっ」という短いことばで、それにまつわるいろいろな状況や気持ちを、相手に余すところなく伝えることができるのです。そんな魔法のようなことばを、私たちは、どうやって身につけて行くのでしょうか。◆名詞や動詞の習得には、「三項関係」や「制約」など、ことばを効率的に覚えて行くための、種々のメカニズムがあるとされています。誰かがリンゴを見つけて「リンゴだ！」と言う場面を見ていた子どもは、その物体全体の名前を「リンゴ」と判断し、覚えて行きます。副詞の習得の場合にも、同様のメカニズムがある程度働いてはいますが、名詞や動詞の場合と比べて、大きく異なる点があります。それは、自分自身の過去の経験や気持ちを、他者のそれと重ね合わせていかななければならない、という点です。「やっ」ということばを誰かが使ったとき、その意味を、その場の状況や他者の観察だけで得られるとは思えません。自分にも、苦勞し待ち焦がれて、何かが実現したことがある。そして、この人も、今まさにそうなのだ。その場面で発せられた「やっ」とは、“簡単でないプロセスの後に何か実現した”という状況や気持ちを表すことばなのだ。きっと、そのようにして覚えて行くはず。そう考えると、副詞の習得には大切なものがたくさんつまっていることがわかります。他者の心への共感、自分の経験の記憶、文脈や状況への注目と理解、因果関係の洞察、時間の概念… それらはすべて発達の基盤であると同時に、成長とともにより高度に、複雑になって行くものでもあります。◆発達障害の子どもにとって、副詞はとても難しいことばです。でも、身近なことばからひとつでも、使えるようになってほしいと思います。たとえば子どもが「やっ」と出来た」と言ってくれたとき、私たちは、そのひと言に共感を覚え、心の通ったコミュニケーションを感じることができます。それは私たちが、暗黙のうちに、「やっ」ということばの豊かさに気づいているからです。今回は、やわらかなコミュニケーションを築いていくために欠かせない副詞について、考えてみたいと思います。